

# 簡易伴奏のための合理的なピアノ（鍵盤楽器）演奏方法

—コードネームを基にした即興伴奏へのアプローチ—

## How to play the piano, keyboard instruments, reasonably to perform a simple accompaniment

—The approach for musical improvisation based on chord name—

辻井 直幸

Naoyuki TSUJII

### 要旨 (Abstract)

音楽を学ぶ者にとり、ピアノ演習は必修である。なぜなら、ピアノは鍵盤楽器という構造上、音楽を視覚的にも捉えやすく、また一人でメロディはもちろんのこと、和声やリズムまで演奏することができるからだ。さらに、音域が広く、殆どの楽器の音域をカバーしているからである。大変便利な楽器であるため、見方を変えるなら、「音楽研究装置」と言っても過言ではない。音楽史に残る大作曲家たちは、すべからくこの楽器の名手である。本稿では、この素晴らしい楽器を、音楽を学ぶ学生はもちろんのこと、一般の音楽愛好家のためにも、より身近に取り扱えるよう、コードネームを基にして単純で効果的な学習方法の開発を提案した。さらに、鍵盤楽器に苦手意識を感じている者にも、この楽器のメリットが活かせるように、誰にでも分かる単純な楽譜例を示しながら、この楽器の演奏上の仕組みを解き明かしつつ論じた。

**キーワード** : (平均律) (鍵盤楽器) (コードネーム) (簡易伴奏) (初見演奏) (即興演奏)

### I. 鍵盤楽器の調律

鍵盤楽器は通常、平均律に調律されており、オクターブを12等分した音程を使っている。それぞれは「半音」という均一に等分された音程になっている。平均律は「音楽の父」と呼ばれるJSバッハがその作品の中で使われた調律のように思われているが、実際は今のような平均律 (Equal temperament) ではなく、色々な調律方法が存在し、作曲家達はそのインスピレーションに合わせてその音律を選んでいったといわれる。このように過去の音楽家(数学者)達は、古くはピタゴラス音律 (Pythagorean tuning) から始まり、音の自然な倍音に基づく、よく協和された純正律音階 (Just intonation) を追求しながらも、限られた調ではあるが「転調」を可能にした実用性の高い中全音律音階 (Meantone temperament) を開発していった。JSバッハは、ウェル・テンペラメント (Well-Temperament) を使用して楽曲を作った。ウェルテンペラメントとは中全音律をさらに調整し、12個すべての調性に適合できる実用的な優れた音律のことを指し、色々なウェルテンペラメントが存在していた。つまり、当時の作曲家は、クラヴサンなどの楽器を自分の手で調律し、作品に合わせて音律を使い分けていたと推察される。

バッハ作曲の「Das Wohltemperierte Klavier」(独)は英語ではWell-Temperamentを指し「良く調律された鍵盤楽器」のことを意味している。だから、日本語での「平均律クラヴィア曲集」という訳は、Equal temperamentを指しているわけではないので誤訳とされ、実際に平均律を使用していたかどうかは定かではない。このように見る

と、現代の音楽に多く使われている平均律音階 Equal temperament は、バロック期から古典派の時代、さらに近代・現代と徐々に普及した音律である。しかし、その創始は意外と古い。平均律音階 (Equal temperament) は 1636 年にマリン・メルセンヌが考案したとされ、主にギターやリュートなどのフレットのある楽器に採用されていたとされる。この平均律は前述したように 1 オクターブを 12 等分しているため、基本的にはオクターブは 2 倍ずつの周波数の関係になってくる。つまりオクターブでは純正律音階 (Just intonation) と同じ響きになり、理論上濁りはない。

しかし、現代のピアノ調律師によると、バロック時代の作品を主に演奏する時にはオクターブはジャストチューニングに近くするが、近代・現代の作品を主に弾く演奏家からは、高域は高めに、低域は低めに調律する依頼が多いという。これは、若干ではあるがそうしないと人間の聴覚上、心地よく聴けないからだと言われている。確かに電子キーボードは、オクターブは合っているが、音階で上がっていった場合、なんとなくフラットな平たい音に聴こえる。だからアコースティックなピアノの調律では、基準音の A440~443Hz を中心にグラフに示すと緩やかな逆 S 字のカーブを描いている。これはピアノ調律師によっても違ふし、彼らの腕の見せ所でもある。弾く作品によって調律の仕方を変えるのは、実力のある調律師にとっては当然のことである。そうでなければ、誰にでも器具さえあれば、機械的に調律はできる。なぜなら、現代は優れたチューナーが何千円で、誰にでも簡単に手に入る時代だからである。それ故プロのピアノ演奏会では、Equal temperament よりも作品にあわせた Well-Temperament を駆使した独自の調律を行っている演奏家は沢山いる。演奏会の途中休憩などでピアノの調律をし直している光景を見ることがある。弾いているときに弦が緩んで直していることもあるかもしれないが、大家となると次のプログラム用の調律に合わせていることもあるという。

## II. ピアノ演奏の原理

ピアノという楽器は、88 の鍵盤を持ち最低音が、ひらがな音の「下二点い音」から最高音の「五点ハ音」まで、幅広い音域をカバーしている。周波数に直すと、A0 が 27.5Hz、C8 が 4186Hz となっている。人間の可聴範囲は一般的に 20Hz ~ 20000Hz と言われているので、特にピアノの最低音は可聴範囲のギリギリの音だと言えよう。最高音はまだ余裕がありそうだが、実際は音としては聴こえるが、音程感はこの音以上は判別が難しくなる。このピアノという楽器は全ての楽器の音域をカバーしていることから「楽器の大様」と言われている。

さて、今回のピアノ演奏法は、コードネームを基にしているため、ジャンルで言うと「ポピュラーピアノ演奏」という部類に入る。電子オルガンの奏法もポピュラー音楽に属するものであるが、奏法的には同じ鍵盤でありながら、かなり違ったアプローチをすることになる。それは、ピアノは両手を使って鍵盤を弾いて音を出す楽器であり、それに対して、電子オルガンは両手に加えて足も演奏に使っている（足鍵盤）ことで、その音楽的構造はかなり異なってくるからである。つまり電子オルガンは足が使えるため、ベース音を手で弾く必要がないということである。このことから、基本的な奏法としては、メロディを右手で弾き、伴奏のコードを左手で押さえ、足でベースを弾く、という構造になる。演奏的には、足が加わった分、難しくなるが、原理的にはかなり自然な形と言えよう。しかし、ピアノには足鍵盤が無いので、ベース音は基本的に左手で取ることになる。当然メロディは右手で弾くわけだから、伴奏の和音を弾く手が不足することになる。そのため、極端な言い方をすると、ピアノという楽器は、右手でメロディ、左手でベースを弾きながら、「余った指」で和音を作るといふ、かなり不安定な奏法を強いられている。しかし逆に、この考え方を正しく理解することが、「ピアノの上達」と「ピアノの良い作品づくり」に大きく関わってくるものだ

と、筆者は捉えている。また、それが今回のメソッドの核になる部分となる。因みに、ジャズのピアノトリオ等でのピアノはコントラバスがベースを受け持つため、奏法的には電子オルガンに近く、左手はバックイングのコードを受け持つ（コンピング）ことになる。

### Ⅲ. コードネーム (chord name) について

下図はハ長調でコードの例を示してみた。アルファベットのCは和音の根音のことであり、その上に長3度と完全5度を重ねた和音をC major chord と言い「シーメジャーコード」と呼ぶ。Dmと記しているのはD minor chord 「ディーマイナーコード」と呼ぶのだが、これは根音のD音上に、短3度と完全5度を重ねた和音のことである。コードネームはこのように和音名をアルファベットの根音を使って簡略した記号である。

## コードネーム

by.Yachiyo Saiku

C      Dm      Em      F      G      Am      Bdim      C

1      2      3      4      5      6      7      8

そして、そのコードがメジャーなのかマイナーなのかを区別するために、メジャーは大文字のMで表し、マイナーを小文字のmで表記するようになっている。また通常、長3和音の場合、大文字のMは省略されることになっている。つまり、上記の「シーメジャーコード」はC major chordであり正しくはC Major chordと記され、CとMという頭文字を記号にしたものであり、さらに大文字のMを省略してC「シー」となっている。長音階の「シ」の音の上（7小節目）に積まれた和音だけは特殊な和音で「減三和音」と呼ばれている。根音のB音上に積まれた和音であるが、Bはドイツ語読みの「ベー」と混同しやすいので上記表ではHを採用したが、アルファベットではBである。ドイツ語読みの「ベー」はコードネーム上ではB $\flat$ と表す。さて、B dimコードは減三和音であるため、D音は短3度上、F音もE音から見れば短3度上に積まれている。減三和音はコードネームでは「ディミニッシュコード (diminished chord) と言い、前記のB dimは「ビーディミニッシュ」と呼んでいる。

今回は音階上に音を合計3つ重ねた和音で説明したが、実際の楽曲は4つの音で構成された「セブンスコード」7th chordや5つ、6つの音で構成される、9thや13thのコードなど、多彩な和音が存在する。今回は3和音だけであるが、他の和音はそれの応用として考えていけば充分であると筆者は考えている。

### 鍵盤練習①

by.Yachiyo Saiku

C      G      C      Dm      Em      F      C      G7      C

1      2      3      4      5      6      7      8

#### IV. 練習方法

##### 1. 鍵盤楽器の練習①

ここから実際の鍵盤楽器の練習に入る。右手はハ長調の音階を弾く。これは隣り合った白い鍵盤を順次進行しながら、音の粒を揃えて、指をスムーズ回す訓練となる。通常の練習曲には、大抵指番号がついているものであるが、この練習曲には後述するものも含めて、あえて指番号は付けていない。

我が国では一般的に、ピアノ演奏の能力とは、名曲を間違わず正確に弾きこなすことを指すことが多い。その観点で言えば、合理的な運指は必須であり、鍵盤演奏には欠かせないポイントである。また、器楽演奏家が演奏中に音を外（ミス）してはプロと言えないのは当たり前である。しかし本来の音楽の能力とは、間違わず正確に演奏することだけでなく、クリエイティブしていく力がなくてはならない。もしそうでなければ、それは単なる「塗り絵」の世界になるからである。昨今はコンピューターも性能がアップして、正しく弾くだけなら人間よりも機械の方が優れている。また、機械は本物そっくり楽器の音色を再現することもできる。実際にメディアで使用される楽曲の演奏は、殆んど電子音で賄っている。これでは、将来演奏家は必要とされなくなる時代が来てしまう。ここで言う「クリエイティブ」というのは、「作曲をせよ」と言っているのではない。音楽の仕組みを理解し自由に音を操れる力を、目指すことを意味している。そのためにも指番号は不要である。自分で弾きやすい指を考えた方が、より学習に繋がる。また楽曲によっては、都合よく旋律が順次進行していないものが多くある。このことから、二手三手、先を読みながら、瞬時に合理的な指使いを判断しなければならない。とくに即興演奏をする場合は、なお更である。指を自在に動かせるように、色々な運指を工夫しなければならない。筆者はこの「即興演奏」が音楽を作っていくうえで最も重要な能力だと考えている。

さて、上記楽譜に戻り、左手の音を見てみよう。単純に全音符で記してみたが、これはコードネームのルート音（根音）にあたる。楽曲の上に示されているコードネームを見て、ベース音を弾く練習である。実際の楽曲では、ベースの音はルート音に限っていないが、まず一番分かりやすい音から練習を進めていくことにした。見ての通り、オクターブで押さえているのはオクターブの間隔を覚えてもらいたいからである。その時は、左手の小指と親指を使っていたきたい。また2小節目は、オクターブでなく単音になっているのは、Cのオクターブの中にあるGの音の間隔も覚えて欲しいからである。その場合のG音は、左手人差し指で取ることをお勧めする。先ほど指番号は指定しなさいと言ったが、それは主に主旋律を弾く場合においてである。オクターブを含め和音を弾く場合は、殆んど手の形は決まって来る。そして、それを覚えることが上達に繋がる。

##### 2. 鍵盤楽器の練習②

次に練習②に入る。ここでは、右手は①と同じである。注意点も同じだと考えてよい。ただ二回目なので、よりスムーズな指回しと、できれば、右手はあまり意識せず左手の方に意識が向くようにすると良い。

#### 鍵盤練習②

by.Yachiyo Saiku

しかし、これは右手を「暗譜せよ」と言っているのではない。今回の練習曲（全曲共）では基本的に暗譜はしな

い。覚えて欲しいのは、音譜ではなく指の形だ。②の場合、左手はオクターブの間隔と8分音符のビート感だ。そして、そこから小指と親指の、交互の運動による疲労に負けない体力（筋力）づくりを目指している。先ほど、「あまり意識せず」と言ったが、これはかなり重要な考え方だ。このくらい単純な楽曲であれば、全く無意識でも暗譜して演奏できると思うが、既存の練習曲のように、その曲が「弾けるようになる」のが目的ではない。どちらかといえば「即興演奏」に近いことを本論では目標としている。簡単に言えば、メロディとコードネームしか付いていない楽譜を、鍵盤楽器で瞬時に音楽的楽曲として完成させ、演奏できる能力のことだ。そのためには、先ほどから言っている、初見演奏能力や即興演奏能力が必要となるわけだ。今回の練習曲は、それを目指していることをしっかりと念頭に入れてもらいたい。さて、右手の練習において確実に意識して欲しいことは、小節の頭の音など、始まりの音だ。そこからスタートをしてどこまで上がっていくかという到達ポイントの音を意識することで、他の経過音は無意識で上がったたり下がったり出来る。全ての音を考えていると初見演奏はできない。音楽には流れがあり、その流れは時間とともに、止まってくれることはないからだ。ではどうすれば良いかというと、音楽にはある程度の法則（パターン）があり、その法則から予測して音を出せば、たとえ非力な情報処理能力であっても十分対応できるはずだ。

### 3. 鍵盤楽器の練習③

ここでも、やはり右手の扱いは変わらない。ここまで来ると、右手は殆んど無意識でも弾くことができるが、注意点は同じだ。上下に進行するメロディのガイドとなる音（スタート音と到達音）を意識して欲しい。次に左手であるが、先ほどの②オクターブと違い、中に5度の音程を含んでいる。

### 鍵盤練習③

by.Yachiyo Saiku

この5度の音は左手人差し指で取って欲しい。②のオクターブの交互よりこちらの方が左手の疲労は少ないはずだ。これは人差し指の介入で小指が若干休めるからである。体力強化の面から言えば②の練習の方に時間を割いた方が良いかもしれない。1小節目の最後のG音は、普通のエチュードならば、左手薬指で取り、次の2小節目の頭のG音を小指へとチェンジさせるのが通例だと思うが、ここでは一小節目のG音は人差し指のままでも構わない。2小節目は、少し離れるが、人差し指の在ったところに、小指を移動（スライド）させる感覚だ。この時、移動に距離があるので一瞬音が途切れてしまうので、右足ペダル（サスティーンペダル）を上手く踏み、活用するとよい。しかし突然ペダルを踏むと、音量・音色が変化してしまうので、常にペダルはセンス良く活用するよう心掛けたい。ペダルはセンスなので決ったルールは無いが通常、和声がチェンジした場合は踏みかえるようにする。これは音の重なりによる濁りを無くすためである。同じように7小節目から8小節目に掛けても音が切れると思うが、8小節目の左手オクターブの音を1オクターブ下げるとスムーズに行くことも感じ取って欲しい。また音を単音にして中指で強く弾いても構わない。何度も言うが、この練習曲は正しく弾くことを目的としていない。奏者の機転の利く、より自由な音のチョイスが目標である。

## 4. 鍵盤楽器の練習④

次に練習④に入る。ここからが、本論の要となる重要な考え方である。これは、今までの練習（メロディとベース）に加えて、ハーモニーを付ける練習である。

## 鍵盤練習④

by.Yachiyo Saiku

最初にも述べたが、ピアノ演奏には足鍵盤が使えず、ベースは主に左手で取ることになる。そのベース音にハーモニーも付ける事はできるが、低音域に3度を重ねることは得策ではない。音は倍音の特質上、低音域は広く、高音域に行くにつれて狭く取ったほうが、より自然で美しいハーモニーが得られる。低音域ではなるべくオクターブか5度までにしておくことを、筆者は提案する。1小節目と8小節目のCとEの3度がほぼ限界だと思っておくが良い。それより下に3度を作るのを控えていくということである。この練習で特に気をつけることは、右手で和音をつかんでいく時にメロディは、ほぼ右手の中指、薬指、小指の3本で弾くことである。残りの親指と人差し指は3度か4度を押さえ、ハーモニーを作っていくということになる。言い換えれば親指と人差し指はハーモニーを作るために、残しておくと言っても良いだろう。だからこの練習曲に限らず、何かのメロディを見たら、右手の中指・薬指・小指の3本の指で弾ける様にするのは案外有効であると言える。

殆どの曲は一拍目にハーモニーが付いているのが通例である。そのときのメロディの運指は、メロディが下降している場合は右手小指で取るようになるが、上行している場合は小指で取るのは得策ではない。なぜなら、先程も述べたようにハーモニーがついているため、右手親指と人差し指は恐らく3度か4度を押さえているからである。その場合に下降しているなら小指でも次の音は薬指、もしくは中指で近い音を取れるはずだが、上行している場合は小指で取ると次の音はかなり指が離れてしまう。このような「クロスフィンガリング」を避けるために、メロディを弾きながら、その行き先を見定めなければならない。また、曲の速さによっても、和音のつかみ方は変わってくる。多くの場合、筆者は曲が速くなればなるほど、和音の構成音は減らすべきだと考えている。極論を言えば、和音は2声で構わない。もしベース音がルートにある場合、メロディが第3音から始まっているとしたら、もはや和声を付ける必要はないということである。

つまり、上記の楽譜例の場合、3、4、5、6小節目はメロディが第三音から始まっているから、3、5小節目のメロディは人差し指で取り親指は3度下のルート音を弾けば良い。もしくは和音にせず、単音でも良いということになる。4、6小節目は下降しているため小指で取った場合は、中指で3度を決め、薬指で取った場合は人差し指で3度下のルート音を弾けば良い。または、その音はルート音であるため左手に任せて、和音を弾くのは親指だけにしても良い。また、全体的に高速になれば、メロディの開始音や到達音は親指や小指で取り、和音をつかむ必要は全く無いということになる。これらの考え方は、先ほどのフィンガリングの関係で音が離れていく場合に間に合わなくなるということと、さらにスピードの速い曲で多くの構成音を鳴らした場合に、曲が重く聴こえてしまうことを避けるためである。しかし、意図的に重厚さやエキサイトしたエネルギッシュな演奏を聴かす場合は、その限りではない。当然

難易度は高くなる。

### 5. 鍵盤楽器の練習⑤

この練習は、一小節の中で二回和音をつかむ練習である。今までの練習と同じように、正しく弾くことも大切であるが、やはり和音をつかんだ時の手の形を、覚えることが目的である。左手はここまで来ると、ほとんどオクターブの間隔は身についていると思われるので、余裕があればリズム等を8ビートのベース音のように工夫して演奏してもよい。それぞれの注意点は④と同じである。

### 鍵盤練習⑤

by.Yachiyo Saiku

ペダルを上手く活用すると、左手ベース音はサスティーン（持続音）が掛り、ずっと押さえる必要はないことを理解できるだろう。④もそうだが、実際のところ、ペダルを使用しないと、⑤のような楽曲を演奏することは不可能である。ペダルを使用すると左手にも余裕が生まれ、たとえば各小節三拍目の2分音符を左手で取っても構わない。さらに余裕が出来ればそのリズムも自在に変化することが出来れば十分である。

### 6. 鍵盤楽器の練習⑥

練習⑥は、⑤からの左手のオクターブのリズムを変えた場合である。ここでは8分音符のビート感を、オクターブの連打で出している。これは一番簡単な方法で、左手の形は今までと変える必要が無く、一オクターブをつかむ感覚でよい。ただし小指への負担は圧倒的に大きく、体力と筋力が必要となる。脱力に心掛け、長時間の無理な練習は避けたほうが良い。そうしないと腱鞘炎にもなり兼ねない。

### 鍵盤練習⑥

by.Yachiyo Saiku

こういう8分音符の連打は、ロックビートの曲に多く、エネルギーでパワフルな楽曲に使用すると効果が上がる。全小節共に左手選指は小指と親指が良いが、6から7小節目への移行は音が離れているので素早い移動が必要になる。その場合のコツは2つある。第1に、音が飛ぶところは、まず目で鍵盤をチラと見て場所を確認することであり、第2はF音とC音の4度の関係を人差し指で間隔を覚え、そこをゲージとして新たに親指を持つてくるようにして音を外さないことである。また当然であるが、ペダルを上手く活用しなければならない。

### 7. 鍵盤楽器の練習⑦

これも練習⑥と同じように、左手のリズムを変えたパターンである。この場合はオクターブと違い、中にルートか

ら見て5度音が挟まれている。この音は左手人差し指で取ることになるが、その間隔と感覚を覚えなければいけない。

### 鍵盤練習⑦

by.Yachiyo Saiku

この場合、小指への負担は先ほどの⑥に比べて1/2となり、体力的には⑦の方がずっと楽になる。さらにこの練習で大切なことは、1小節目の最後の音と2小節目の最初の音が同じであるため、左手人差し指の位置に次の小指を持ってくる感覚を身につけることである。次の2小節目から3小節目の切り替えも同じである。4小節目の頭は左手薬指で取っても良いだろう。7小節目頭のC音は前の小節のC音左手人差し指の所に親指を持ってくれば良い。

### 8. 鍵盤楽器の練習⑧

練習⑧は、さらに右手で多くの和音をつかみながらメロディを弾く練習である。左手の注意は⑦と同じである。この場合の右手は、和音を弾くために親指と人差し指は1拍目と3拍目は固定されてしまうことになる。つまり右手メロディは演習④でも言ったように、ほぼ中指、薬指、小指で弾くことになる。この場合に筆者が提案するのは、なるべく右手トップノートは薬指で取るようにすると、とくに初見演奏の場合は有効になることである。

### 鍵盤練習⑧

by.Yachiyo Saiku

これは薬指で取ることにより、上にも下にもどちらにも切り替えしが可能になるためである。是非参考にされることを期待する。ここまでの練習で明らかなのは、この独自のピアノ奏法は、意外と中指を使用しないことである。これは、中指を「使わない」ということではなく、なるべく取って置く（温存する）という意味である。そうすることにより、いざという時に中指も使えることから、さらにスムーズな演奏ができるわけである。つまり4本指でも演奏可能な位の能力があれば、5本指ではかなりの余裕が生まれるということである。

## V. 演習

### 1. 聖者の行進①

今までの練習のまとめとして、ここからは実際の楽曲を弾く方法を考察していく。



## 聖者の行進①

by.Yachiyo Saiku

この演習の目的は、「聖者の行進」をただ弾けるようになることではない。まず、この曲が今までのテクニックを使い、どのように構成されているかを知ることが先決である。「聖者の行進①」を見ると、左手は8分音符のロックビートである。前項の練習では②⑥にあたる。右手は今までの和音のつかみ方を駆使して取り組む必要がある。まず弱起で始まるこの曲は、導入音には和声は付けないのが通例である。それは、単音の方がメロディラインをはっきりと示すことができるからである。通常、和音にすると音の厚みは増すが、音質としては柔らかくなる傾向があり、メロディに和音が付くと輪郭がぼやけてしまうことになる。1小節目は今までの演習から、トップノートのG音は薬指で取る習慣を身につけたい。これは前述したように、薬指は高い方にも小指を残し、低い方にも中指を残しているため、どちらにも行ける便利な運指だからである。また薬指は小指と比べてしっかりとしたタッチが期待でき、メロディをより浮かび上げることにも向いている。特に4小節目は是非薬指でD音を取り、次のE音が小指で自然に押さえられると感じ取ることが重要である。そして次の5小節目も同じだ。1拍目と3拍目のトップノートは薬指で取り一番高い4拍目のG音を小指で取っていくことになる。運指は本論では「指定しない」と最初に書いたため、矛盾かもしれないが、先程から言っている運指は、指定しているのではなく、自然に決まってくるものである。つまり「自由・自在な指使い」というのは、合理的な運指に支えられていることを忘れてはならない。また、スムーズな指使いも大切ではあるが、前述した薬指のようにタッチの強さも指によって多少違ってくる（いわゆるピアノ練習は各指のバラツキを無くす均一なタッチを目指しているが・・・）ため、筆者は多少スムーズさを欠く運指であっても、より音楽的なアプローチを優先する。

## 2. 聖者の行進②

いよいよ最後の演習となる。「聖者の行進②」は筆者が、この曲を即興で適当に簡易伴奏をつけた場合の一例である。これはアイデアとして、まずこの曲を8ビートのリズムに乗せて弾いてみたかったからである。そのために、右手和音はコードをつかみながら、8ビートのリズムを出すために2、4拍目にもなるべく4分音符でコードを鳴らすようにした。単純な例ではあるが、ここまで学習が進めば、これ位の曲なら誰でも即興で簡易伴奏が付けられる。さらに、解答は無数にある。実践的学習者は、さらに面白いアプローチを考えることは可能である。ここで示したものは、全てハ長調で記してあるため、他の調でも工夫して取り組んでみるべきである。本来は全調で練習するのが望ましいが、実際の楽曲ではクラシックの「名曲」を除いて、使用される調は限られて来る。特に音楽教師を目指す者は、まず#、b 3個までは確実に取り組まなければならない。筆者の経験上、#、b、4個まで弾きこなせれば、既

存の曲で困ることはない。

## 聖者の行進②

by.Yachiyo Saiku

Piano

### V おわりに

繰り返し論じたが、先述した練習をこなせば、それで「完成」という訳では無い。普通のピアノ練習曲は、きちんと正確に弾けるようになったら完成といえる。本論では、ここまでの取り組みは、単なる「きっかけ」であり、学習者はこれまでの知識を、自分なりに消化し応用していかなければならない。

例えば、今回の練習曲でも下段の楽譜を隠して、右手だけの楽譜にして新たに左手を入れてみるのも良い。また、色々な楽曲を自分なりに工夫をし、初見で楽曲の即興伴奏を付けてみるトレーニングも必要である。それには、沢山こなすことが一番の上達に繋がる。「沢山こなす」とは沢山練習することには違いないが、「塗り絵」のように、単調で無意識な練習を数多くこなしていくことではない。それはそれで体力や耐久力は付くだろうが、いつまで経っても自分で音楽を構築することはできない。もし、いわゆる「ピアノ教室」で習うような練習を正しくこなして行くだけで、そのような力が付くのであれば、すでに皆が、楽譜など無くても好きな曲を流暢に楽しく弾きこなしているに違いない。筆者の指導した生徒には、ショパンの「革命」を間違えず正確に弾ける者はたくさんいた。しかし彼らは、好きな歌謡曲を、既存の楽譜なしで弾ける者はほとんどいなかった。これからの音楽教育には、特に器楽演奏の分野では、その楽器を正確に弾きこなすテクニックとともに、音楽的理解と創造的表現力を身につけさせていくことが求められる。また、そうでなければ、コンピュータ等の機械にその職を奪われていくことになる。現に、その波は我々の間近に来ている。